

## 柳田国男とJ・G・フレイザー

佐伯有清

### 一

柳田国男の民俗学には、イギリスの民族学者J・G・フレイザー (James George Frazer, 一八五四—一九四二) の影響が強いといわれている。事実、柳田国男自身も、佐藤信衛氏が「西洋の民俗学というものはご存じなかったのですか」という問いを発したのに答えて、

その時は知らなかったんです。あとでフレイザーなどと読んだのです。やはりフレイザーに一番大きな影響を受けています<sup>(1)</sup>が。

と述べている。この柳田の発言にふれて、中村哲氏は、

柳田がフレイザーの学問に触れたのは、正確に何時とはいえないが、民俗学的な関心をもってから「あとでフレイザーを読んだのです。やはりフレイザーに一番大きな影響を受けていますが」といつているので最初からではなかった<sup>(2)</sup>。

と記し、そしてその注で、中村氏は、

ここで「あとで」といっているのは明治三二、三年に農商務省に入って、山間に立ち入る機会があり、そのとき以後という意味にとれるが、明治四一、二年ころ民俗学的な仕事を出していったあとということではな

いと思う。<sup>(3)</sup>

と述べ、柳田がフレイザーの学問に接した時期を正確に指摘することはできないが、柳田のいう「あとで」とは、明治四十一年、二年（一九〇八―九）ころ以降ではないであろうとしている。

中村氏が「明治三二、三年に農商務省に入つて」と記し、また「明治四一、二年ころ民俗学的な仕事を出していった」というのは、佐藤信衛氏が、柳田に「どういふ動機で、民俗学をお始めになつたのですか」と尋ねたのに対し、柳田が、

もう何べんも動機は変わりましたがね。私は以前農商務省におつたのです、そうした時に、三十二か三の時分に非常な山の中に入つてね、あれは明治四十一年、二年の頃です、その時に非常に田舎のちがつた世界に触れたことがあるんです、それが一つの動機ですね。<sup>(3)</sup>

と語っていることをふまえているのである。この談話から知られるように、柳田が「非常な山の中に入つた」のは、「三十二か三の時分」、すなわち三十二、三歳のころのことであるから、中村氏が「明治三二、三年に農商務省に入つて、山間に立ち入る機会があり」としたのは、誤解であ

る。また柳田が「あれは明治四十一年、二年の頃」といっているのは、「三十二か三の時分」を受けているのであるから、中村氏のように、「三十二か三の時分」を「明治三二、三年」と解し、また柳田が「あとでフレイザーなど読んだ」と語っているのを「明治四一、二年ころ民俗学的な仕事を出していったあとということではない」として、柳田のいう同時点でのことを別時点としてとらえるのは、誤りであろう。

柳田国男が「三十二か三の時分に非常な山の中に入つてね、あれは明治四十一年、二年の頃です」というのは、明治四十一年（一九〇八）五月に、甲州・武州の境を歩き、さらに三ヵ月にわたつて九州・四国を歩き、この旅行中の見聞の一つとして翌年二月に、『後符詞記』を出版した時点を指していることは間違いない。明治四十一年は、まさしく柳田の満三十二、三歳の時分にあたる。したがつて柳田のいう「あとでフレイザーなど読んだのです」の「あとで」は、明治四十一年、二年以後のことではなければならない。

もっとも中村哲氏は、「先生は友人の父君にあたり、そのため、執筆中の先生の書齋に入入する機会が多かった。……それに、柳田民俗学の詩心に惹かれるところがあった

し、その上、いまでも、先生を自分が触れてた限りでの、もつとも偉大な学者と感<sup>(6)</sup>じている」ほど柳田国男の身近かにいた人であり、また柳田民俗学に関心をいだいていた人である。『定本柳田国男集』別巻第五に収められている「年譜」に、

明治四十五年・大正元年（一九二二）

四月二十一日、フリーザーの『黄金の小枝』（金枝篇）五冊を読みはじめる。

大正二年（一九二三）

八月、フリーザーの『穀神論』、『不死靈魂論』等を読む。

大正八年（一九一九）

五月十五日、フリーザーの『旧約民習論』を購入。

とあるのは、中村氏が前掲の文章を書いてから以後に発表されたものであるから知らないのは当然である。しかしながら柳田の身近かにいた中村氏が、「柳田がフリーザーの学問に触れたのは、正確に何時とはいえない」とし、また「明治四一、二年ころ民俗学的な仕事を出していったあとというのではないと思う」と誤ったことを述べているのには、理由があつたことであろう。それはかつて柳田

が、「自分は曾て故坪井教授から、右のフリーザー先生の噂を聞いたことがある<sup>(7)</sup>」と語つたことや、また佐藤信衛氏の「日本では先生の前にそういうことをやった人はございませんですか」との問いに、柳田が、

それは、フォルクスタンデということを言い出した高木君という人がいます。この人は「日本伝説集」とかたくさんの著書のある人です。もう一人、前にあつたのですけれども、それは未だに知りませんが、人類学会というのが最初にできた時にフリーザーを紹介したりしきりにやっている人があつたんですが、知らずにおりました<sup>(8)</sup>。

と答えていることが念頭にあつたからであると考えられる。というのは、これらの柳田の発言は、はなはだ漠然としており、坪井正五郎（一八六三—一九一三）の名や、彼が中心となつて創立した人類学会のことがでてくるので、柳田がフリーザーのことを聴き、その学問に接したのが、明治四十一、二年よりも前のことであつたようにも思われるからである。

しかし、柳田国男がフリーザーの著作を読むようになったのは、柳田自身が語っているとおり、明治四十一、二年

より以後のことであり、また「年譜」に明記されているように、その時点は、明治四十五年（一九二二）四月以降のことであった。

その時点を明確に物語っている資料については、節をあらためて紹介したいが、いま一つの問題は、柳田国男がフレイザーの著作を読むようになったのは、どのような契機からなのかということである。

この問題について、伊藤幹治氏は、次のような推定をしている。

柳田がフレイザーの著作に親しむようになった契機は明らかでないが、ことによると人類学者坪井正五郎あたりから示唆をうけたのかも知れない。というのは、柳田が「自分はかつて故坪井教授から、……フレイザー先生の噂を聞いたことがある」(Ethnology とは何か、一九二六年)と、みずから語っているからである。<sup>(9)</sup>この伊藤氏の推論が妥当でないことは、柳田が何時からフレイザーの著作を紐解くようになったかを示す資料によって、自からあきらかになるであろう。

## 二

柳田国男がフレイザーの学問に触れるようになった契機について自ら語る時、「あとでフレイザーなど読んだのです」とか、「自分は曾て故坪井教授から、右のフレイザー先生の噂を聞いたことがある」とかの発言にみられるように、はなはだ曖昧模糊としている。

こうしたことは、柳田が古い昔のことを語るものであるから当然——それでも前者は昭和十五年（一九四〇）の発言、後者は大正十五年（一九二六）のもので、とくに後者はフレイザーの著作を読みはじめてから十五年しか経ていない時の発言——とはいえ、その発言が漠然としているのに、いくばくかの疑いもたれるのである。そこには、柳田にとって、口にしたい人物が存在していたからではないか。

その人物とは、南方熊楠（一八六七—一九四二）である。南方と柳田とは、柳田が「私は明治四十二、三年ごろ縁があつて先生に接近しはじめて、後にまことに馬鹿げたことで先生からうとんじられて、その間六、七年しかお付合ひ

をもつてゐない人間であります<sup>(10)</sup>と語っているように、わずかな年月で絶交してしまつてゐる。しかし、その交際の期間中に数多くの手紙が両者のあいだにかわされたのである。柳田が南方から受け取つた手紙について、「私などの交遊は明治四十三年以後、僅か六年余りしか続かなかつたが、それでも浄写をして十数冊の量がある」と記し、また「およそ一年半か二年の間、毎日のように手紙をもらつた。日によつては一日に三、四回も使りが来るほど、じつに筆まめな人であつた。……私は二年近い間の手紙を半紙に写して、『南方来書』と名づけて幾冊かの本にしておいた」と述べているほど、「南方来書」は、膨大なものであつた。その「南方来書」の中に、柳田国男とJ・G・フレイザーとのかわりを知る鍵が存在している。

明治四十四年（一九一三）三月二十六日付の柳田国男宛の南方熊楠の手紙には、

独逸の小児は今も鶴（コウノトリ）より生ずといふ者多し。これらの信より Totem は生ぜしなりとて、英人 フレザー氏近著「トテミズム及び外族婚」と題せる大著二巻あり。小生購ふこと能はざれども、大意は雑誌の批評にて見申候。<sup>(11)</sup>

とあり、また同年九月二十八日付の書簡には、

普通に足無しとする幽霊に足音有る由は屢ば聞く所也。無碍に此事を解せんとならば、次の或る英人が昨年印度より龍動タイムスに通信せる語を心得置くを要す、曰く東洋人の心は論理の常規を脱し、能く同時に二つの正反對せる事譚を信認す、東洋人をして輒く信を置しめんとならば其誕全く信す可らざる者たらざる可らずと(Frazer: Adonis, Atis, Osiris, 1907, p. 4. 注) 斯る矛盾説は素より西洋人にも多し、何ぞ特に東洋人を咎めんや。<sup>(12)</sup>

とみえ、さらに同年十一月十二日付の書簡には、

「デシヤ」の木の事貴説の如くば侍者か又は持咒者の義なるべく候。男子を女装せしめて神に仕へ咒事を司どり、又託宣を述べしむる事、外国にも例多く支那にも丹鉛総録に漢時代既にありし由記し有り。五年前出版の Frazer: Adonis, Atis, Osiris, (Atis は母にほれられしを免れんとて自ら宮せり、それより此風起るといふ) といふ大著述に多く例あり、小生所持するが今此室には無し。<sup>(13)</sup>

とあり、またこの「デシヤ」に関して、同年十二月十二日

付の手紙に、

遠碧軒記上の三に、地しやといふもの、男が女体にて  
白き単の広袖の物を打かけて数珠を首にかけ下駄をは  
きてあり、笠被の類か、又は行者と見ゆ、鬚はありて  
男が女のまねしたるものなり。今年春頃出版の「此  
花」第十三枝に、名は忘る、かゝるものゝ図あり。：  
：其図貴下御覧なければ小生写して進ずべし。女装し  
て鬚ある乞食なり。甚醜きものなり。五年ばかり前出  
版 Frazer の Adonis といふ著に、かゝるものゝ例夥  
く集めあり、理由も詳しく論じあるなり。

とあって、それぞれフレイザーの著書 Totemism and  
Exogamy, 1910, Adonis, Atis, Osiris, Studies in the  
History of Religion, 1906 のあること、およびその内容  
の一部を柳田に報じている。

こうした南方の教示によって、柳田がフレイザーの著書  
を購入し、読みはじめたことは、次の柳田の南方宛書簡に  
あきらかである。

(一) 明治四十五年四月二十六日付

御教示によりフレイザーの『黄金の枝』第三版を買ひ  
入れ、このごろ夜分少しづつよみ始め候。なかなかひ

まのかかる事業に候が、日本ばかりと存じをり候ひし  
風習の外国に多きを知り候ことは大なる愉快に候。

(二) 大正元年十二月五日付

この間中零碎の時間にてフレイザーの『黄金の枝』三  
版五冊……をよみ了り、目下スキートの『マレー俗信  
篇』を見てをり候。

(三) 大正元年十二月十五日付

一昨日『ゴールデン・ボウ』の第五編着、よみはじめ  
候。小生が兼ねて心がけをり候田の神山の神を細論せ  
しものごとく (The Spirits of the Corn and of  
the Wild) 非常に愉快によみはじめ候。

(四) 大正二年二月五日付

フレイザーの三版第二(二)巻の(二)巻の中に、米土人等鮭を  
二子ふたごと関係あるものごとく信すること見ゆ。このこ  
と日本にも類型あるがごとくに候。何かのおついでに  
御蘊蓄を御発表下されたく、小生も少しく書き申した  
く候。

(五) 大正二年九月十八日付

春の二月八日(または十二日)に山の神里に下り田の  
神となり、十月の八日(十二日)に田の神山に入りて

山の神となるという風習全国にひろがり、江戸の初午などまたこれに出づるものなること、小生はよほど詳しく材料をあつめをり候。フレネザーの「スピリット・オブ・コーン」の説を補ふに足るべしと思ひをり候。忙しいため何もあたまはし、遺憾はなほだしく候。

右に掲げた(一)の手紙によって、柳田がフレイザーの *The Golden Bough* 第三版を購入し、読みはじめたのは、明治四十五年(一九二二)四月からであり、そしてこの著を讀むことになったのは、その前年、しばしば南方熊楠の手紙に接し、そこでの南方の教示によるものであったことがあきらかとなる。そして(二)や(三)の手紙によって、柳田が日本独自の風習とばかり考えていたものが、フレイザーの著作に接して、外国にもその例の多いことを知り、柳田がいかに知的興奮の高ぶりをみせたかは、「大なる愉快に候」や「非常に愉快にのみはじめ候」などの文面に躍如としてゐることから指摘できる。

こうした柳田の知的興奮がどれだけ大きなものであったかは、次に掲げる明治四十五年(一九二二)四月二十二日付の佐々木喜善宛の手紙によっても知られる。

過日は御葉書有りがたく候。小生此頃は本業も怠るは

ど読書をして居り候故、貴兄及伊能先生へも御無沙汰ばかりいたし居候。其代には近々面白き本を御目にかげ可申候。何ごとでも深く入込むと出て来られなくなるものにて、よきが様にせんと思へども、ケムブリッジのフレイザー教授の如きは、二十二年前に「黄金の枝」といふ伝説に関する一書を出し、十二年前の再版に之を倍に迄増補し、一昨年第三版にては、それが菊版の五百頁など細字の本七冊と成れり。之をよむに我々が日本ばかりと思ふ習俗伝説ギリシヤにもシリヤにもエジプトにもあること多く、もとは単に一小篇の遠野物語も、十年二十年の中には如何に成長するかも知れず、伝説の中には、石さへ盛に成長するに付、カツパを猿といふこと貴説は不承知なれど、伝説と云ふものは、其やうに成長して行くのが普通にて、始ハ三百年程前迄のカツパといふ文字すら日本になかりしものが、今日ではこれを猿だといふても、人が信ぜぬやうに日本に固定したる也。此事は小生の著書、此原稿紙にて四十余枚之を論じ且つ証してあるなり。早く刊行したけれどまことに暇少なく残念に候。(下略)

この手紙は、南方宛の書簡(一)の四日前に書かれたもので

ある。ここでも柳田は、「之をよむに我々が日本ばかりと  
思ふ習俗伝説ギリシヤにもシリアにもエジプトにもあるこ  
と多く」と記し、南方熊楠へ「日本ばかりと存じをり候ひ  
し風習の外国に多きを知り候ことは大なる愉快に候」と報  
じる前に、すでに佐々木喜善にも同様の「驚き」を書き送  
っている。

このように、柳田国男は南方熊楠の教示によって、フレ  
イザーの学問に触れ、大きな興奮につつまれたにもかかわらず、  
後年、柳田がフレイザーについて語る時に、どうし  
て南方の名前を出さなかつたのであろうか。その理由に  
は、かならずや柳田が南方と絶交したことが隠されている  
に相違ない。柳田がフレイザーを語る時、南方のことは一  
言もふれず、しかも漠然としか表白しなかつたために、伊  
藤幹治氏のように、「柳田がフレイザーの著作に親しむよ  
うになつた契機は明らかでないが、ことによると人類学者  
坪井正五郎あたりから示唆をうけたのかも知れない」と推  
測されてきたのは、けだし当然のことであつた。

しかし、上に見てきたことによつて、いまや柳田国男に  
フレイザーの存在を教えたのは、南方熊楠であつたと断じ  
てよいであらう。そして柳田がフレイザーの研究内容を南

方の書簡を通じて知つたのは、明治四十四年三月以降であ  
り、また柳田がフレイザーの著書を直接入手して、読みは  
じめ、その内容に「驚き」を感じたのが、明治四十五年四  
月以後のことであつたのである。ここに至つて、前に掲げ  
た柳田の「もう一人、前にあつたのですけれども、それは  
未だに知りませんが、人類学会というのが最初にできた時  
にフレイザーを紹介したりしきりにやつている人があつた  
んですが知らずにおりました」というわかりにくい発言の  
中に出てくる「フレイザーを紹介したりしきりにやつてい  
る人」とは、南方熊楠を指していると解してよいかもしれ  
ない。たとえは、南方は、明治四十一年九月に『人類学雜  
誌』第二十三卷第二七〇号に発表した「涅槃に就て」で、  
「フレイザー氏は、く、齋忌の制はポリネシア(ハワイとニュ  
ージーランドの間)、その発達を極むといえども、その痕  
跡は他の諸多の地にも見るを得べし」となどと、フレイザ  
ーの説を紹介しているからである。ちなみに、この論文は  
南方が『人類学雑誌』に載せた最初の論文である。



明治四十五年四月二十二日付の佐々木喜善宛の柳田国男の手紙に、「ケムブリッジのフレイザー教授の如きは、二十二年前に『黄金の枝』といふ伝説に関する一書を出し、十二年前の再版に之を倍に迄増補し、一昨年第三版にては、それが菊版の五百頁など細字の本七冊と成れり」とあるのは、柳田がフレイザーに対して驚異と畏敬の念をいだいたことを端的にあらわしている。そしてその気持ちがいざばらく持続したことは、大正六年（一九一七）三月に発表した柳田の次の文章によってうかがえる。

我々の尊敬するフレイザー教授は、其靈魂不滅篇の序文に、「我日將に西せんとす、我業何れの時か成らん」と歎いて居る。而して是が四十から五十迄の間に約七千頁を著した人の言である。

柳田のこうした態度は、その後の講演にも示されている。大正十五年（一九二六）四月の日本社会学会の講演「日本の民俗学」の中で、柳田は、次のように話している。

サー・ジエムス・フレイザーの如きは、其師タイラー

の勇猛な学説を祖述して、所謂文明の中に残留する野蛮の痕跡を、指示すること最も丁寧であつたが、彼の著「旧約全書のフォクロア」三巻に至つては更に同一研究法を押し及ぼして、次々に昔今の多くの民族の前代を知得する手段とした。自分等をして言はしむれば、是れフォクロアとエスノロジーとの婚約であつた。：フレイザーは又多大の勤勞を以て、パウサニオスの全紀行を註釈して世に公けにした。紀元後第二世紀に生息した此希臘人の漫遊時代には、アツチカもペロポネソスも既にバルナシヤンの神代を去ること遼遠なるのみならず、ソフォクレスやオイリピデスの世の中に比べても、亦遙かに近代となつて居ることが、之によつて具体的に開示せられる。即ち古典時代の文化にも亦成長があり変化があつたことを、あまりに単純なる今迄の崇拜者に理解せしめたことは、小さからぬ學問の功績であつた。

柳田は、また同年五月、文話会で行なつた講演「Ethnologyとは何か」で、フレイザーについて、

其（E・B・タイラー）門下の出身にして藍より青しの評ある Sir James Frazer の如きも、我々の知る

限りに於て最も精勵なる学者であり、画時代的大著を幾つも発表して、七十の老翁となつても尚孜々として学問をして居る人だが、彼は師匠のタイラー先生とは違つて、骨の寸法や目の色毛の色、又は地下の石器人骨にはさして興味を有たず、……例へば呪術の盛衰、靈魂不滅思想の發達、旧約全書古伝の構成、又は同族避婚の慣習の分布及び意義といふ類の題目に、其生涯の精力を傾注して居たにも拘らず、尚自分の学問を Social Anthropology、即ち社会人類学と標識して居た。……此先生は日本の民間の学者等が一つもつて居ても羨まれてよいものを、四つまでも兼ね有して居る。四つといふのは第一には完全なる文庫、第二には優秀なる助手の数名、三には良き細君、四には金である。有名な Golden Bough 金枝篇が、中二十年を隔て、三版を重ね分量を五六倍にし、索引と引用書目のみで龐然たる一大冊を為すに至つたのも、第三以下は兎に角、他の二つの条件の具はつて居た為といつて宜しい。日本のことが如何に取扱はれて居るか、大なる興味を以て注意して見ると、我々が満足する迄には無論材料を精選してはゐないが、少なくともアイヌの

土俗の如きは、日本では得られまいと思ふやうな十数種の書物を渉獵してある。行届いた研究のし方であると思つた。<sup>(26)</sup>

と語っている。しかし、これらの講演の内容をよく吟味してみると、フレイザーに対する敬意は變つてはいないが、フレイザーへの驚異の念はうすらぎ、その学問を客觀的にみる余裕が生まれてきており、またやや皮肉の言説さえもらしているのに気がつく。後者の講演には、なお「フレイザー教授ならずとも、完全なる書齋で学問を続けようとする国々の学者には、全く隔世の感ある新学術の曙であつた<sup>(27)</sup>」とか、「各人の研究が微に入り細を穿ち、どんな論文が出て居るかを知らただけですら容易で無い。フレイザー教授はいつ迄も羨まれる<sup>(28)</sup>」とかみえるのも、それに類するであらう。

ところで、柳田国男は、明治四十五年（一九二二）四月からフレイザーの著作をつぎつぎに読破していったのであるが、それが、どのように柳田の著作に生かされたかを、以下にみてみよう。それは大正四年（一九一五）一月に発表された「夜啼石の話」が最初である。発表順にフレイザーについてふれた文章を配列してみると次のごとくである。

- (一) 唯一つ思出すことは、フレエザー教授のトテミズム・エンド・ニキゾガミイの中に、スペインサア及びジレンの名著を引いて、濠洲の或蛮族には尚姪娠分娩の原因が男女の交会に在ることを知らぬ者があり、各部落には一定の靈地があつて死者の魂魄は悉く此地に集合し居り、通行の婦人を見掛けて其胎内に宿ると子が出来ると信じて居る。故に若い女の母となることを欲せざる者其地を通行する際には、わざと腰を屈め懺嗔声を作つて、自分の到底子を産む能力無き者であることを装ひて魂魄を欺く云々と記してある事である。<sup>(29)</sup>
- (二) 大正四年一月、「夜啼石の話」『日本及日本人』第六四五号）  
 ゴンムの「英国土俗起原」やフレエザーの「黄金の小枝」などを見ると、外国には近い頃まで、この神靈を製造するために橋や境で若い男女を殺戮した例が少なくない。日本ではわづかに古い／＼の世の風俗の名残を、かの長柄の橋柱系統の中に留めてゐる。<sup>(30)</sup>（大正七年一月、「橋姫」『女学世界』第一八巻第一号）
- (三) フレエザア教授などは、酒精をスピリットと呼ぶのも、飲んで満身に熱の伝はるのを、靈ありて入り来ると感じた結果だと説いて居る。<sup>(31)</sup>（大正八年、「祭礼と世間」

『東京朝日新聞』

- (四) 十二月二十五日は、ジュリヤ暦の冬至の日であつた。過去千数百年の久しい間、羅馬の土の底に埋れてゐたミトラの信仰においても、この日を若き日輪の新たに蘇へる日として祝したことは、さまざまの金石文にその痕を留めてゐる。初期の基督教徒は乃ちこの古代の外形を踏襲したのであらうと、フレエザア教授は論じてゐる。……（昭和四年十二月、「新たなる太陽」『週刊朝日』第一六巻第二六号）
- (五) 古い世に其の樹相を望んで年の豊凶禍福を卜知した名残りで、それには寄生木の最も普通なる一種が特に日本では榎の梢に寓し易かつたといふ天然の事実が、原因を為して居るだらうといふのがフレエザア教授の説から心づいた私の一つの意見であつた。<sup>(32)</sup>（昭和六年三月、「なんぢやもんぢやの樹」『郷土』第一巻第二号）
- (六) フレエザア先生の名著「ゴールデン・パウ」にも、オスチアツク人の中に路傍の靈樹に箭を射立て、神を敬ふ作法として居る例が、注意せられて居ることを教へてくれた。<sup>(34)</sup>（昭和六年七月、「御頭の木」『郷土』第一巻第三号）

(七) 實際この東北の鮭に助けられた話や、鮭と共に祀られて居る先祖の兄弟の話などを見るとよほど北米の土人の間に存するトテムの信仰と似て居る。フレエザー先生などのトテム考には、此程度の事実が有れば、トテム信仰の昔あつた痕跡だと認めて居られる。しかしそれは今後の興味ある研究問題といふのみで、今はまだ少しでも確定した事実でも何でもない。其前に先づ我々は忌がタブーと全然同じものか否かを、もつと多くの事例によつて確かめなければならぬ。<sup>(35)</sup> (昭和八年五月、「忌と物忌の話」『土の香』第五〇号)

(六) 次にそれから二十五年ほど後に、英国第一流の学者サー・ジエムス・フレエザアが、是もラングエジ・オブ・アニマルズ、即ち動物の言葉といふ題で一文を公けにしました。<sup>(36)</sup> (昭和十二年七月、「鳥言葉の昔話」『昔話研究』第二巻第九号)

(五) 長崎貿易の時代から、日本の皇室の御事に関して、西洋人の記述したものは数多く、その若干はフレエザーも引用して居るが、大抵は都に遠く住む土民の口を經たもので、事実の精確で無いものが多いのは自然である。其中にはケムプエルの有名な「日本史伝」も数

へられるが、大御門は決して土を御踏みなされぬといふことを、如何にも事々しく報告してあるのが私には意外であつた。杓を召してもなほ地上には御立ちなされぬものと解したらしいが、それならば正しく事実には、又素足を土に触れぬといふことならば、それは恐らく上流の一般生活であつて、タブーでも何でも無い筈である。……土を忌む風習の世界的分布に就いては、既に幾つもの研究が出て居ることと思ふが私はまだ二種しか読んだことが無い。その一つは、前にも名を掲げたフレエザアの *Balder the Beautiful* の第一章……<sup>(37)</sup>。(昭和十七年八月九月、「肩車考」『民族文化』第三巻第七〜九号)

(四) 大陸北方の二三の民族の中にも、同種の慣行(佐伯注、アイヌのイナオの木のこと)があつたのみか、ナウ又はラウといふ名称まで、是に近いものがあるとフレエザア教授の著述にも見えて居た。<sup>(38)</sup> (昭和二十六年四月、「鳥柴考要領」『神道宗教』第三号)

(三) 北欧其他の小麥地帯でも同様の信仰(佐伯注、穀母が穀草を産むという信仰)は既に百年來の発見が積み重なつて居ることは、故フレエザア教授の穀靈考の中に詳

かで……。(39) (昭和二十八年七月、「国語史のために」『国語学』第二輯)

(5) 私は曾てフレネザー教授の書に依つて、穀霊相統の信仰が、弘く北歐其他の小麦耕作地帯に流伝して居たことを教へられ……。(40) (昭和二十八年十一月、「稲の産屋」『新嘗の研究』第一輯)

これらは柳田が、大正四年(一九一五)から昭和二十八年(一九五三)まで、およそ四十年に近い年月の間に、各種の論考においてフレネザーのことにふれた文章である。これを通覧して、まず注目されることは、(5)の論説である。

みられるように、(5)では東北における鮭に助けられた話や、鮭とともに祀られている先祖の兄弟の話などが、北米のインディアンの間にみられるトーテムの信仰と類似していることにかかわらせて、フレネザーの説を引きあいに出し、「しかしそれは今後の興味ある研究問題といふのみで、今はまだ少しも確定した事実でも何でもない」と、フレネザーの方法に対して批判的な立場を柳田は表明している。

この問題で思い出されるのは、大正二年(一九一三)二月五日付の南方熊楠宛の柳田国男の書簡に、「フレネザー

の三版第二(？)巻の中かに、米土人等鮭の二子ふたこと関係あるもののごとく信ずること見ゆ。このこと日本にも類型あるのごとくに候。……小生も少しく書き申したく候」とみえることである。柳田は、フレネザーの著作を読みはじめたばかりの時は、この手紙で率直に言っているように、外国の事例と同じ類型に属するものが、日本の習俗伝説にもみられることに興奮したのであった。しかし、(5)の時点、すなわち昭和八年(一九三三)ごろになると、柳田は、フレネザーの学説を冷静に受けとめるようになっていたことが、(5)の文章によって知られる。事実、これより二年ほど前の昭和六年(一九三二)七月に発表した(6)の文章につづけて、柳田が「この方面にも又支那・朝鮮にも、無論捜したらまだ幾つかの類型が見つかることと思ふが、たゞ我々の研究がまだ今日の状態にある間は、直ちに国外の比較に進出して見てもしやうが無い」と述べているのも、フレネザーの学説を安易に受け入れることへの自戒の言葉と解される。この柳田の意見を、かつて柳田が南方熊楠より受け取った手紙に、

民俗・伝説の学に、何たる統合帰納せる総論甚乏しき  
に比して(英語ではフレネザーの金樞篇、ハートランド

のベルセウス篇の外に先づ無し、制度経済の方には夥しく其著(論)有ること前便に申上し如くなれば、何卒最近刊のもの五六でも求め、本邦の事実に対して外国の例を示し、同を同、異を異として、同は之を大體の論に併せて述べ、異は之を新たに本邦より新事実新原則を見出せしものとして訓導する所あらば、蓋しまじめな人は、民俗学などの材料雑多の珍談にして何の実(43)のこらぬよりも、有難く思ふべし。

とあるのと比べてみれば、いかに対照的なものであったかがわかるであろう。柳田は、南方のこうした考え方に反発していたかのようでもある。そして(4)の文章にみられるように、フレイザーが用いている資料に対して、柳田は積極的に批判を加えるまでになっている。

この間、柳田は「一国民俗学の確立を期」(44)するための意志表明を、昭和九年(一九三四)八月に刊行された『民間伝承論』で行なっている。その中で、柳田はフレイザーの学問に対して、

サー・ジェムス・フレイザー Sir J. Frazer などの、是に代るべき新学名として提案した社会人類学といふ言葉は、此二つを兼ねようとした為(45)に、恰も満洲の荷

車(46)が馬と黄牛とを共に繋いだ如く、真直ぐには走つて行けない状態に陥つて居る。

という厳しい批評を加えている。この評言を柳田が、八年前の大正十五年(一九二六)四月に「日本の民俗学」という講演で語つた「自分等をして言はしむれば、是れフオクロアトエスノロジ」との婚約であつた(46)という言葉と比較してみると、それがいかに辛辣なものに変化しているかが理解できるのである。

柳田のこのようなフレイザーへの見方の変化は、柳田の志した「一国民俗学の確立」、すなわち「日本民俗学」の樹立と深くかかわっていたと考えられる。

#### 四

昭和二十年(一九四五)以後、すなわち第二次世界大戦後に柳田が、フレイザーの所論にふれた文章は、前掲の(4)、すなわちアイヌのイナオの木に關係したもので、および(4)・(4)の「穀霊相統の信仰」をめぐつてのものである。

柳田が、戦後とくに(4)・(4)の文章にみられるように「穀霊」をめぐつて、あらためてフレイザーの論説に注目した

したことは、未完の草稿である「倉稻魂考」で、次のように述べていることから知られる。

フレゼザ教授の名著、「穀霊と山野霊」が世に出たのは一九一二年、それが程無く日本にも渡つて来て、深い感動を与へたことは、自分も読者の一人として永く記憶して居る。但し問題の出発点が、主として北部独逸に於ける小麦耕作に伴ふ行事であり、先駆者キルヘルム・マンハルトの創見に導かれたものである故に、我々はまだ久しい間、之を異国の羨むべき学業の進みと解するのみで、それを東洋の稲作民族の場合に、あてはめて見ることを怠つて居た。宇野圓空博士の「マライシャの稲米儀礼」といふ雄大な報告が公けにせられたのは、それから約二十年も後のことであつて、之を精読した人ならば、この東西二つの穀種の間、に於ける慣習の類似、殊に穀母が一期毎に穀童を産み育てるといふが如き、顕著なる前代信仰の残留は、よもや偶然なる一致ではあるまじく、或は之に基づいて初期人類の知能觀念の成長過程を、跡づけしめる端緒にもならうかといふことに、想ひ到るべきはずであつたが、不幸なことにはこの前後二つの雄篇を併せ読む

機会は寔に少なく、……宇野氏は或はすでに気づいて居られたかも知れぬが、フレゼザの書を精読したと称する我々が、実はまだこの東西の一致に心付かず、永い歳月を過して居たといふことは、申しわけも無い怠慢であつた。<sup>(47)</sup>

この文につづけて柳田は、「三笠宮殿下が、今度新嘗祭の根原を明かにせんとして、斯ういふ一つの研究団体を作られた」<sup>(48)</sup>と書いているので、この「倉稻魂考」を柳田が執筆したのは、「にひなめ研究会」が発足した昭和二十六年（一九五二）七月以後、そして柳田が昭和二十八年二月二十四日の例会で「倉稻魂神名考」を報告した以前のこととしてよいが、この時点で、柳田が反省の意をあらわしながら、フレゼザをあらためて取りあげはじめたことに注意するべきである。これは、戦後になってフレゼザが喧伝されはじめた線上に沿つての柳田の発言ともとれるが、戦後に柳田が未解決の大きな問題の一つとして取り組んでいた「稲作がどこから、どうなつてきたかということ」<sup>(49)</sup>と関連して、あらためて「田の神」のことを願ひみ、それともなつて、フレゼザの学説が呼び覚まされたというべきかもしれない。柳田が南方に宛てた前掲<sup>(5)</sup>の書簡で、

「昨日『ゴールデン・ボウ』の第五編着、よみはじめ候。小生が兼ねて心がけをり候田の神山の神を細論せしものごとく(The Spirits of the Corn and of the Wild)非常に愉快によみはじめ候」とその感激を記し、また(田)の書簡で、「フレネザーの『スピリット・オブ・コーン』の説を補ふに足るべしと思ひをり候」といった意気込みが、ここで思い出される。

柳田が最晩年に、「穀霊」に關係して、次のように述べていることも、ここで付け加えておくべきであろう。

今からちょうど百二十年ほど前、ドイツにウィルヘルム・マンハルトという不遇な学者があつた。主として北海沿岸を調べたのであるが、この地帯の小麦の種取りには、穀霊相統の信仰という、非常に注意すべきものがあることを指摘したのである。すなわちコーン・ゴッド(穀霊)というのがあり、コーン・マザア(穀母)という神様がコーン・チャイルド(穀童)を産み、それが翌年の種となってゆくと思はれている。穀母が穀童を産み育ててゆく、そのために産屋トモヤの祭があり、二代目の穀物はその産屋でスピリット(魂)を穀母から受けるというのである。宗教学者の宇野圓空君がマラ

イを歩いて長い間かかって、「マライシアにおける稲米儀礼」という大きな本を出したが、その報告の中にもこれと同じような信仰がある。マンハルトの発見した時分には、世間はこれを相手にしないし、ことに宗教学者などは、そんなことをいってはいけないというようなことさえ言っていた。そのため彼は不遇なままに死んで行つたが、その後、私らの読んだフレイザー教授(『ゴールデン・ボウ』の著者)の本に、今から五十年前前にマンハルトという気の毒な学者が、こういうことをいい残して死んだと書いて大変褒めていることが判つた。それによつてはじめて小麦のこのような信仰を知り、またマライシアでも稲について全く同じ習慣の残つていることが、新たに宇野教授の報告で解つたのである。<sup>(2)</sup>

柳田国男とJ・G・フレイザーのことについては、なお記しておきたいことがある。それは、すべて別稿にゆずることにしたい。ただ柳田が戦後、フレイザーの業績をどのように評価し、またフレイザーにふれて日本民俗学研究者の今後のとるべき研究態度をどのように考えていたかを知るために、昭和二十四年(一九四九)四月に行な



われた座談会での発言を最後に掲げておくことにしよう。

(一) 私が陶醉するような気持ちで本を読んだのはフレイザーの『金枝篇』The Golden Bough だけだ。『旧約全書』の『フォクロア』Folklore in the Old Testament なども、新しい印象であったが、三分の二まで読んで後はまだ怠っている。あの人のものは今ふり返ってみると、注意力が非常に行き届いていて、結論が簡明直截でないのも貴とく、すべての小さな事実を粗末にしてはならぬという考えを養いえたのは、これはまったくフレイザー先生のおかげです。南方熊楠氏の非凡さは、もつとまとまりがつかぬようだが、ともかくも国際的の一致、民族相互間の共通性というものがこんなにあるものかを考えて、終りにエリオット・スミスの説にも、耳を傾けるようになった。時間が足りなくてドイツのものを読んだのはずっと少なく、日本の民俗学にもしもドイツの民族学者の影響が少なかったとすれば、それはわれわれも責任を分たなければならぬ。読んでいる人があるとは思いますが、私がフレイザーを読んだような熱心さでは読んでいない。(下略)

これは、石田英一郎氏が、「フレイザーやタイラーの業

績などからも、暗示を受け、成果をとり入れられたことと存じますが、そういった思い出をもう少しおきかせ願えませんか」と尋ねたのに答えたものである。この柳田の発言が、フレイザーに「陶醉」し、傾倒した当初の柳田の気持ちを正しく伝えたものであることは、さきに掲げた柳田の南方熊楠宛の書簡(一)、および(三)と比べてみることに、よって確かめられる。

(二) とにかく日本のいちばん特徴的だと思われる点も間違いなしに記述して、そうしてそれを国内で説明ができなければ、国外の事例の対照すべきものを求めて、解しやすくするというのが民俗学をやっているものの態度であってよい。日本だけで説明がつくと思っても、起源論的にこれに似通ったものの考え方があるかどうかは考えてみるべきだ。……これは人種の変る毎に、むしろ違うのが当然かもしれないが、そうもいえない実例を、フレイザーなどが数多く示している。

柳田のこの発言は、柳田が「一国民俗学の確立」を期していた戦前のころの態度とは大きく変わってきていることを示している。戦後における柳田民俗学の成長と発展、そして柳田が期待した日本民俗学研究のあり方を、この発言の

中に見いだすことができるであろう。

注

- (1) 『柳田国男対談集』(『筑摩叢書』26)、六〇頁。
- (2) 中村哲『柳田国男の思想』、二四頁。
- (3) 中村哲、前掲注(2)書、三二頁。
- (4) 前掲注(1)書、六〇頁。
- (5) 前掲注(1)書、六一頁。
- (6) 中村哲、前掲注(2)書、二八六頁。
- (7) 柳田国男『Ethnologyとは何か』(『定本柳田国男集』第二五卷)、二三五頁。
- (8) 前掲注(1)書、六一頁。
- (9) 伊藤幹治『柳田国男 学問と視点』、三〇頁。
- (10) 柳田国男『南方熊楠先生——その生き方と生れつき——』(『定本柳田国男集』第二三卷)、四三二頁。
- (11) 柳田国男『南方熊楠』(『定本柳田国男集』第二三卷)、四二八頁。
- (12) 柳田国男『故郷七十年』、二七八頁。
- (13) 『南方熊楠全集』10、書簡(三)、一一一—一三頁、および飯倉照平編『柳田国男南方熊楠往復書簡集』、一四頁。
- (14) 前掲注(13)書、一六〇—一六一頁。

- (15) 前掲注(13)書、三一三頁、および飯倉照平編前掲注(13)書、二〇五頁。

- (16) 前掲注(13)書、三三八—三三九頁、および飯倉照平編、前掲注(13)書、二二頁。なお柳田国男宛の南方熊楠の書簡でフレイヤーにふれたものには、(一)大正三年(一九一四)五月十日付、(二)同年五月十九日付、(三)同年六月二日付の書簡がある。(一)の書簡には、「諸國に成女期に遅れた女子を闌室に閉こむる風あり。フレザー、是は月水を不浄とする齋忌に出と言しを、大発明なりと学者共いふ。こんなことは議論迄もなし。日本では誰に知り切て居るなり」(『南方熊楠全集』11、書簡(四)、一七三頁)と見え、(三)には、アイサー・モリソンという人物が生存中に「大英類典」(エンサイクロペディア・ブリタニカのこと)にその伝が載っていることとふれて、「金槌篇のフレイヤーすらかく有名なるに、其書は多く引れながら、其伝は見へず」(同上書、二二六頁)とある。(二)の書簡は、本文の一三頁以下に掲出する。
- (17) 飯倉照平編、前掲注(13)書、二七六頁。
- (18) 飯倉照平編、前掲注(13)書、二九四頁。
- (19) 飯倉照平編、前掲注(13)書、三〇三頁。
- (20) 飯倉照平編、前掲注(13)書、三二三頁。

- (21) 飯倉照平編、前掲注(13)書、三三三頁。
- (22) 『定本柳田国男集』別巻第四、四三九頁。なお原文には句読点はないが、いま私が仮りに付した。
- (23) 伊藤幹治、前掲注(9)書、三〇頁。
- (24) 柳田国男『郷土研究』の休刊(大正六年三月、『郷土研究』第四巻第一二号、『定本柳田国男集』第三〇巻所収)、四四二頁。
- (25) 『定本柳田国男集』第二五巻、二五四頁。
- (26) 『定本柳田国男集』第二五巻、二三四―二三五頁。
- (27) 『定本柳田国男集』第二五巻、二三六頁。
- (28) 『定本柳田国男集』第二五巻、二四三頁。
- (29) 『定本柳田国男集』第五巻、五〇三頁。
- (30) 『定本柳田国男集』第五巻、二二九頁。
- (31) 『定本柳田国男集』第一〇巻、四二六頁。
- (32) 『定本柳田国男集』第一三巻、一八一頁。
- (33) 『定本柳田国男集』第二二巻、二三五頁。
- (34) 『定本柳田国男集』第二三巻、二六〇頁。
- (35) 『定本柳田国男集』第二七巻、三一六頁。
- (36) 『定本柳田国男集』第六巻、三一五頁。
- (37) 『定本柳田国男集』第二〇巻、四〇八―四〇九頁。
- (38) 『定本柳田国男集』第一一巻、一七六頁。
- (39) 『定本柳田国男集』第二九巻、二一〇頁。
- (40) 『定本柳田国男集』第一巻、一八五頁。
- (41) 飯倉照平編、前掲注(13)書、三三三頁。
- (42) 『定本柳田国男集』第二三巻、二六一頁。
- (43) 『南方熊楠全集』11、書簡(四)、二一四―二一五頁。
- (44) 『定本柳田国男集』第二五巻、三四九頁。
- (45) 『定本柳田国男集』第二五巻、三四九頁。
- (46) 『定本柳田国男集』第二五巻、二五四頁。
- (47) 『定本柳田国男集』第三一巻、一五九―一六〇頁。
- (48) 『定本柳田国男集』第三一巻、一六〇頁。
- (49) 三笠宮崇仁「序文」(にいなめ研究会編『稻と祭儀』新嘗の研究第三輯所収)、一頁参照。
- (50) 松平斉光「あとがき」(にいなめ研究会編『新嘗の研究』第一輯所収)、二五五頁参照。
- (51) 柳田国男、前掲注(12)書、三六二頁。
- (52) 柳田国男、前掲注(12)書、三六七頁。
- (53) 『民俗学について——第二柳田国男対談集——』(筑摩叢書146)、六八頁。
- (54) 前掲注(50)書、二七頁。